

戦争は二度と起こすまじ

中原区支部 伊藤 文治（弟）

戦没者 伊藤 幸平

戦没地 西部ニューギニア

昭和十九年当時、私は十四歳、法政二中の二年生でした。

そのころ内地では、連日のように偵察機の侵入による警戒警報が発令され、いよいよ戦いが身近に迫ってきた感を深めておりました。

そのさなかに、学校周辺の生徒による「法政二中学生徒学校防衛隊」が組織され、その一員として空襲警報発令時には、学校に詰めるようになりました。

まもなく時計塔のある大学予科の建物には陸軍の本土防衛隊の一部が入ってまいりました。勉強にも身が入らない日々の暮らしの中で、二年生にも勤労学徒動員令が出されました。

中原区下沼部にある日本電気多摩川工場（現在のNEC）の真空管工場に向き、その製造の一部に携わるようになりました。当時は大西学園中、横浜女子中などから女子中学生も出向いており、おかつぱ頭に日の丸ハチマキを締めて隊列を作り工場の門を行進をして入構する姿が頼もしく思えました。又、女子挺身隊として北海道より大勢の女子が私の近くにある女子寮に入居し

てまいり、共に同じ工場で働いておりました。

その後、今度は三菱重工（現三菱自動車工場）に移り、靖国神社に展示されているのと同型の人間魚雷や火薬を大量に詰め込んだ小型ボートに乗せるディーゼルエンジンの中心部になるクランクシャフトの製造に携わり、油にまみれる毎日を送りました。

その頃、戦況は一段と厳しさを増し、沖繩に米軍が上陸し戦争がますます激しくなっていました。その中で私たちは米軍の相模湾上陸に備えて、敵を迎え討つための陣地（トーチカ、塹壕）構築の作業を手伝いました。近くのお寺さんの本堂に泊りこんで、毎日太い赤松の丸太を担ぐ仕事をさせられ、米軍が上陸して来たら塹壕に隠れて、敵の戦車が攻め来たら火薬を背負って体当たりをする作戦とのことでした。若く元気な男子は皆もつと激しい戦場に行き、残された壮年以上の兵隊さんばかりでしたので、最後は我々がやる羽目になるのかとの思いで毎日の作業を続けてまいりました。

南方の島、サイパン、硫黄島の守備隊が激しい米軍の砲火の中で玉砕しました。

その後、すぐに爆撃機の発着が可能な滑走路を建設して、本土空襲の準備を着々と進めておりました。これまでの軍需工場を中心とした爆撃から、新しい戦略爆撃として夜間低空飛行による焼夷弾爆撃に切り換えられました。当時のアメリカの爆撃機は「空の要塞」といわれたB29戦闘爆撃機で、乗員は八名位乗っているとても大型の飛行機でした。

そして、二十年三月十日には、東京の下町が一夜にして焦土と化した東京大空襲が始まったのです。皇居、明治神宮、東京駅を含め、大変な被害を受け、被災者は十万人以上の多きにのぼ

りました。

四月十五日夜には川崎、横浜にも三百機ほどのB29による大空襲があり、我が母校も木造校舎ゆえにあつという間に焼失してしまい、なすすべがありませんでした。そのため学校での授業もできなくなっていました。

工場も戦災に遭い、操業もままならなくなっていました、自宅待機の日々が続くので農作業の手伝い等で過ごしておりましたが、時には我々唯一の遊び場である今井神社の境内で三角ベースの野球をしておりましたが、突然に近くにある軍需工場目掛けて米軍の艦載機グラマン戦闘機による機銃掃射を受け、あわてて拝殿の床下に潜り込みました。

ものすごい爆音と同時にバリバリという機関銃による掃射で、身体を小さくして隠れていましたが、大きな葉莢がカラカランと飛んできたので吃驚しました。

その葉莢の大きさと搭乗の飛行兵のこちらを見る顔がはつきりと見えたのをしっかりと覚えております。

戦況が一段と厳しくなり、毎日空襲警報のサイレンが鳴り、防空壕との往復が続く日々でした。いつ米軍が九州南部、又、相模湾、房総九十九里に上陸してくるかと思ひ重苦しい気分をみんなが持っていました。

八月六日に広島に新型爆弾が投下されたとのことだったが、これが世界で初めて使われた原子爆弾でした。一瞬にして広島町の町が灰燼に帰したのであります。続けて今度は長崎にも原爆が落とされ、今後この日本の国から都市というものは無くなってしまうのかと思ひでした。

世間が騒がしい数日後の八月十五日正午、天皇陛下より玉音放送があるとのことで、友人宅で少し雑音の入るラジオで聴き耳をたてて聞いておりましたが、我々には少し長く、中身が解らなかつたがしばらくして、「あつ戦争に負けたのだ」と知つた次第でした。

翌日からは空にサイレンもならず、高射砲の音も響かず、夜も静かに休め、やつと長かつた戦争が終わりを告げたことを実感したのでした。

戦争という、大切な家族、父、兄を失い国同士がいがみ合い殺し合い、争うことの愚かさ、平和の貴さ、ありがたさを噛み締め、過ちを二度と繰り返すことのなきよう遺族の一人として少しでも残された人生を後世の人達に伝えてまいる所存でございます。